

## 戦史編さん官の思い出

元戦史編さん官 市来 俊男

私は昭和 47 年 3 月海上自衛隊を退職し、当時市ヶ谷にあった戦史室に戦史編さん官として勤務して、中国方面海軍作戦の戦史の編さん、刊行に従事することになった。当時の戦史室長は島貫武治元大佐（陸士 36 期）、海上班長は小田切雅徳元大佐（海兵 52 期）で、海上班には他に角田求士元中佐（海兵 55 期）、末国正雄元大佐（海兵 52 期）、富永謙吾元中佐（海兵 54 期）等の諸先輩が居られた。

陸上班、航空班は初代戦史室長西浦進元大佐（陸士 34 期）を始め、陸軍省、参謀本部の要職に勤務した人たちや、戦後早い時期に服部卓四郎元大佐（陸士 34 期）を中心に『大東亜戦争全史』（全 4 巻、鱗書房、昭和 28 年）を発表した関係者が集まっていて、陸軍関係の編さん業務は海軍に比べて大幅に進捗していた。海軍側は小田切さんはじめ優秀な人たちが揃えたものの、陸上班のように纏った資料はなく、終戦後大部分焼却、亡失した残存史料の収集から始めなければならなかった。また海軍の先輩の中には、「戦史は金と足だけでは書けない」と言って、素人の編さん官に何ができるかと言われる人もあった。これらに加えて、陸自に比べて海自の戦史室に対する期待、支援協力は今ひとつという感じもあり、苦労が多かった。

「戦史叢書」は昭和 40 年に定められた長期計画で、41 年以降に公刊することが決定された。その際、海上班は時期尚早を主張した。元来陸上班、航空班は「陸軍戦史第一案」を編さんしていたが、海上班は史料が不足し、「海軍作戦記録第一次整理」と称して、史料編を編集しようという態度であった。戦史室ではこの二つを合わせて「基礎案」と呼称して、史料庫網戸の中に収納されていた。このように、海上班は戦史の編さん、公刊準備は進んでおらず、勢い陸軍関係の戦史から順次公刊されるようになったのは止むを得ないことであった。

着任当時、私は小田切海上班長から、「史料編を作るつもりでやれ」と言われた記憶がある。同時に先輩たちに言われたことは、「常に疑問（問題意識）を持って」ということと、「背景をよく洗え」ということであった。

中国方面海軍作戦の編さん作業を進めるにあたり、まず前任者が集めた膨大な資料に目を通し、整理することから始めると同時に、背景となる明治初年以降中国に所在する日本を含む各国の権益、利害を研究した。このようにして支那事変勃発に至る日本海軍の警備、居留民の生命財産の保護、各種権益の擁護の実態を解明することに努めた。これらの作業は現代の共産中国の前時代史で興味深く、暑い盛り、人のためでなく史料のために冷房さ

れた史料庫で、「公文備考」その他の古い史料を読みふけることが楽しみでもあった。

当時戦史叢書は本文約 600 頁（編さん用原稿用紙 1 枚は 25 字×20 行=500 字。2 枚で戦史叢書上下 2 段 1 頁）が標準であった。ところが、この標準を越えて 700 頁～800 頁となるものが多くなり、石油ショックの影響で物価が騰貴したこともあって、昭和 44 年度以降本文は 550 頁～600 頁以内に止めるよう規制された。このため基礎案を大幅に圧縮しなければならず、原稿作成に期日と頁数が決められているので、素人同然の編さん官の私はストレスが溜まり、毎年の健康診断で胃潰瘍と診断され、薬を飲みながら執筆の毎日であった。そして 1 冊仕上げると、胃の調子はけろりと良くなるのが常であった。

『中国方面海軍作戦<1>』は昭和 49 年 3 月に刊行された。本文 544 頁で明治以来の日中関係を背景に、日本海軍の中国警備の変遷、支那事変勃発初期の海軍作戦の概要を記述したものである。引き続き『本土方面海軍作戦』の編さんを担当し、本土周辺海域における主として内戦部隊（鎮守府部隊）の本土海上防衛作戦の概要を、本文 467 頁で記述したもので、昭和 50 年 6 月に刊行された。

昭和 55 年 1 月、第 102 巻『陸海軍年表一付・兵器・用語の解説』をもって、「戦史叢書」の公刊は完結し、防衛研修所戦史室が発足してから 24 年の長い歳月を経て、大事業は終わった。このときにあたり、第 3 代戦史室長で初代戦史部長の梅博元陸将は次のように述べられた。

「この戦史叢書は後世の史家と国民のために、ひとつの礎石を提供したものに過ぎないといえよう。少なからぬ欠落や、一部の誤りが含まれることは避けられない。これらを補足するとともに、この先人の歴史の中から、将来の日本のために絶えず教訓を汲み出して行くのが、戦史室の後身である戦史部の勤めである。」

今や市ヶ谷駐屯地の景観は大きく様変わりして、嘗ての戦史室の木造二階建ての建物は跡形も無く、知る人も無くなった。わずかに「殉職隊員慰霊碑」の脇に、梅戦史部長揮毫の大きな自然石の「戦史室跡」の碑に、その名残を留めている。時折ここを訪れて、西浦室長以下戦史室に勤務された先輩、同僚の面影を偲び、編さん官時代の苦労を懐かしく思い出している。